

<序>

イスラーム教の宗教行事ラマダン(断食月)最後の金曜日の2021年5月7日、最も神聖とされる「ライラ・アル・カドル」の夜である。イスラエル軍の攻撃がパレスチナ人になされた。ユダヤ教、イスラーム教、キリスト教の聖地であるエルサレムのアルアクサ・モスクで数万人のパレスチナ人が祈っていた時である。そこは、アブラハムがイサクを捧げたと言われる岩を囲って699年に建設された。1993年2月23日、筆者は牧師になる前、アルアクサ・モスクに靴を脱いで入った。祈りの磁場があった。「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と義認の原点である(創世記15:6)。まだモーセの律法も、割礼もない。イエス・キリストに対する信仰告白もない。しかし、義認とは、一度も罪を犯したことがなく、いささかの良心の呵責もなく、神の御前に出られること。アブラムは、経典の民にとり信じる(πιστεύω ピステウオー)の模範である。岩のドームはユダヤ教にとっても神聖である。イスラエル政権は国連、国際世論の非難を無視して、そこに軍を差し向け、エルサレムを完全支配しようとしている。宗教間の対立に見えるが、ユダヤ教、イスラーム教の指導者も強引な政治手法には、反発している。「剣をとる者は皆、剣で滅びる」とみことばに立つ信仰者はどう判断すべきか。

a. イスラエルと米国

9・11テロの反撃という大義名分で、米国はアフガニスタンのタリバンに攻撃をした。空爆により親が犠牲になった。孤児たちには何の罪もない。どうしてキリスト教国と言われる国が残虐さを剥き出しにしたのか。「キリスト教」の旗の下で、「和解」への道どころか、テロの温床を創造する破壊、抑圧、偏見の現実がつきつけられた。26歳から筆者の中には、キリストの再臨が近いこと、エルサレムに神殿が再建、エゼキエル書38章、ダニエル書、黙示録の千年王国について、超ファンダメンタリズムの聖書観があった。音を立てて崩れ落ちた。神戸国際キリスト教会の牧師として、イスラエル国のイツハク・リオール大使の通訳、ヘブライ語教師、神学校で教える神学は、福音主義であった。福音派のルーツであるブレザレン派の教会形成に励み出して6年目の分岐点になった。改革派神学校などで、終末論を聴講していた。筆者は、「こんなに悪が許されているのに、神はいるのか」などの「疑い」について説くパウロ・ティリッヒ[1886-1965]の「懷疑者の義認」に目が開かれた。

b. 「前千年王国説」

英国、アイルランドから起こったプリマス・ブラザレン、ロシアから移住したメノナイト派、日本では同胞派(キリスト集会)の三つはキリスト再臨に関する終末論のディスペンセーションが共通している。イスラエルが再建された1948年を基点として終末への歴史観をもっている。ちょうど100年さかのぼった1848年に、ブレザレン教会のダービ(John Nelson Darby)はファンダメンタリストの源流になる『ダービ訳』聖書に基づいて携挙、前千年王国キリスト再臨説を唱えた。ダービこそ福音派の旗手であり、逐語靈感説の先生であった。アメリカ生まれのキリスト教である福音派、エホバの証人、末日聖徒イエスキリスト教会の産みの親と言っても過言ではない。非戦論の内村鑑三、明石順三や、中田重治[1870-1939]も終末論は同根と言ってもよい。近年では、二元論に基づき、トランプ元大統領を支持する中川健一牧師の言説も、「Q

アノン」の面からではなく、「イスラエル」の歴史的な位置づけをどう意義するか思慮深い識別が求められよう。反対する側を共産主義者と排除する思考は近視眼的だ。前千年王国キリスト再臨説では、戦争、飢餓、貧困で苦悩する発展途上国の孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者に平安は無縁である。2001年、筆者は、「解放の神学」こそが制度宗教の抑圧する側から貧者に視座を転換すると確信した。

### c. 東日本大震災

2011年3月11日、「しゃべくりより現場での実践」で目指そうと御霊に促された。「最も小さい者の一人」である底点が叫ぶ自然災害の現場に立った。死と向きあうこと、死者との対話、イエスによる「一つにまとめられる」(アナケファライオースイス エフェソス 1:10)の福音を言葉ではなく、生き様で流し出す戦いが始まった。まったく素人であったにもかかわらず、農・林・漁、傾聴ボランティアに漕ぎ出した。「神戸国際支縁機構」という事業もなく、助成もない小さな群れが被災地に急行し、炊き出しなどを行ってきた。すでに2000人以上が参加。ひとりでも心の復興が必要な被災者がいれば、東北ボランティアは、119回、熊本地震の益城、福岡県の松末、岡山県の真備、北海道の厚真などに訪れている。「田・山・湾の復活」という自然生態の回復を祈る。行動が祈りである。「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」、と山林が放置され、海が放射能汚染水で汚れ、動植物が呻いている「場」に寄り添う(ローマ 8:22)。

ゲレンデにかけつけるのは、学歴の高い者ではない。有資格者でもない。雄弁でない。とても聖職者になれそうもない貧しい者たちである。「路上生活者(ホームレス)」、「統合失調症、分裂症、うつと言われた方々」や「ひきこもりだった方たち」が「はたらき」の中心である。イエスに追随したのは民衆(ギリシア語オクロス)である。「人々がイエスのところへ、いろいろな病気や痛みを苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々を癒された」(マタイ 4:24)。だからこそ痛み、苦しみ、怒り、くやしさに感情移入できる。3年やれば、卒業ではなく、続くのである。お金はいつもない。しかし、心は豊かである。「私は、あなたの苦難と貧しさを知っている。しかし、本当はあなたは豊かなのだ」(黙示録 2:9)。なぜなら与える側から、受ける側に転換しているからである。

### <結論>

パレスチナ、中東のテロについて、神は侮られる方ではない。政治家、戦禍をもたらした指導者は、コロナ禍にあっても、教育・医療・福祉をパレスチナの人々にもたらそうとしない。70年以上になる。そんな連中の祈禱師になってしまった薄情な宗教家こそメタノイア(μετανοέω (悔い改め)すべきだろう(ローマ 1:31))。